

The background of the entire image is a photograph of a sunflower field. In the foreground, several sunflowers are visible, their bright yellow petals and dark brown centers facing towards the right. The sky above is a clear, vibrant blue, dotted with wispy, white clouds.

「すばらしい教者が語る」

ジョン・グラントの  
幸いな学び

「すばらしい教者が語る」

ジョン・グラントの

幸いな学び

# ジョン・グラントの幸いな学び

## 目 次

- (一) 「心に始まるリバイバル」
- (二) 「ヒゼキヤを襲つた三つの試み」
- (三) 「敬度の奥義」(その一)
- (四) 「敬度の奥義」(その二)
- (五) 「神の人」
- (六) 「キリスト者の姿」
- (七) 「パウロの最後の勧め」

一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 一

「すべての支配者なる主」

「キリストの模範」

「キリストの学校」

「主の弟子であるための三つの柱」

「天の資産」

「五つの召し」

「主に従う者たちの生活—その三つの特権」

「信者に与えられた大いなる特権」

「しもべなる主イエスの偉大なる模範」

「福音の前進と信仰の進歩」

あとがき

一八六

二〇八

二三〇

二四六

二七七

二九九

三二五

三五一

三七四

三九二

四一六

# ジョン・グラントの幸いな学び

## (二) 「心に始まるリバイバル」

こんばんは。今日は神のみことばかり、三つの短い箇所をお読みします。最初は第二列王記十八章一節から八節、次に第二歴代誌二十九章一節から四節、そして最後に第二歴代誌三十章一節です。

イスラエルの王エラの子ホセアの第三年に、ユダの王アハズの子ヒゼキヤが王となつた。彼は二十五歳で王となり、エルサレムで二十九年間、王であつた。彼の母の名はアビといい、ゼカリヤの娘であつた。彼はすべて父祖ダビデが行なつたとおりに、主の目にかなうことを行なつた。彼は高き所を取り除き、石の柱を打ちこわし、アシエラ像を切り倒し、モーセの作った青銅の蛇を打ち碎いた。そのころまでイスラエル人は、これに香をたいていたからである。これはネフシュタンと呼ばれていた。彼は

イスラエルの神、主に信頼していた。彼のあとにも彼の先にも、ユダの王たちの中で、彼ほどの者はだれもいなかつた。彼は主に堅くすがつて離れることがなく、主がモーセに命じられた命令を守つた。主は彼とともにおられた。彼はどこへ出陣しても勝利を収めた。彼はアッシリヤの王に反逆し、彼に仕えなかつた。彼はペリシテ人を打つてガザにまで至り、見張りのやぐらから城壁のある町に至るその領土を打ち破つた(Ⅱ列王記十八・一一八)。

ヒゼキヤは二十五歳で王となり、エルサレムで二十九年間、王であつた。彼の母の名はアビヤといい、ゼカリヤの娘であつた。彼はすべて父祖ダビデが行なつたとおりに、主の目にかなうことを行なつた。

彼はその治世の第一年の第一の月に主の宮の戸を開き、これらを修理した。さらに、彼は祭司とレビ人を連れて来て、東側の広場に集めた(Ⅱ歴代誌二九・一一四)。

さて、ヒゼキヤは全イスラエルとユダに使いを遣わし、またエフライムとマナセに手紙を書いて、エルサレムにある主の宮に来て、イスラエルの神、主に過越のいけにえをささげるよう呼びかけた(Ⅱ歴代誌三十・一)。

この出来事の二百五十年前、イスラエル王国は二つに分かれました。北の半分はダビデの家に逆らった十部族から成っており、この北の王たちの記録を読みますと、そこにはただのひとりも善良な王のいなかつたことがわかります。

しかし、ユダ王国には何人かの善良な王たちが出ました。私たちは今晚、その中で最良の王たちのひとりから、いくつかの教訓を学びたいと思います。その記録を読みますと、特にすぐれた王は四人います。その四人の王は、彼らの父祖ダビデの道を歩んだことが記されています。その王たちとは、ヨシヤパテ王、アサ王、ヨシヤ王、そして、今日学ぶヒゼキヤ王です。他にも良い王様はいましたが、この四人の水準には達していませんでした。

今晚考えたいのは、善王ヒゼキヤの治世に起こつたりバイバル(信仰の回復、復興)のことです。父からヒゼキヤに任せられた王国、それは光を失つて衰え果てた国でした。

ヒゼキヤの父はアハズで、この王はユダ王国を盡的暗黒へと追いやっていました。

第二歴代誌二十八章十九節に、アハズはユダを裸にしたと記録されています(英欽定訳)。ユダ王国からその富を失わせたのはアハズでした。

アハズはエルサレムの神の宮を閉じ、だれも宮の中に入ることができないようにしました。彼はダマスコの偶像の祭壇に似せて大きな祭壇を作り、偶像を礼拝するためエルサレムの至る所に祭壇を作りました。これほど悪い王であつたため、第二歴代誌二十八章二十七節には注目すべきことが書かれています。彼を葬るとき、人々は彼を王たちの墓に葬ることを拒否したのです。このような国では、いつたいだれが何か良いことをできるでしょうか。

この国の人々の靈的状態を、正確に調べてみたいと思います。エルサレムの神の宮において、礼拝は全く行なわれていませんでした。さざげられるべきものは全くさざげられず、祭壇は冷たい状態でした。従つて、そこには礼拝することをしない民が存在しました。神を満足させるような、神のみもとへと立ち上る礼拝は、その影さえありませんでした。礼拝を受けるべき神が否定されていました。私たちが私たちの生活の中で冷たい祭壇を持つことのないように願っています。一つ一つの集会の祭壇が冷たいものではないことを望みます。

こういうわけで、エルサレムでは礼拝が全くなかつたと言うことができます。

また、神の宮のともしびも消されていました。それゆえ、礼拝が存在しなかつただけでなく、光が存在しませんでした。このようなとき、冷たい祭壇が私たちの生活の

中にはいってきます。それゆえに、私は、一つ一つの集会の祭壇が冷たくならないよう願うのです。神の真理である光がなくなれば、その結果は悲惨です。

アハズによつて神の宮のすべての器具が粉々にされていました。そのため、神殿の中で祭司が務めを行なうことは不可能でした。そこには礼拝がなく、光がなく、そして、祭司の務めがありませんでした。

また、神殿の庭にはだれもいませんでした。だれもはいることがありませんでした。これは、神の民の間に交わりがなかつたことを示しています。彼らは宮に集まることができませんでした。また、宮の戸は閉じられていました。そのため、神のご臨在の場に近づくことができませんでした。これは悲劇と言ふべき破滅的状態です。しかし、今日、私たちの回りにそのような状態を時折見ることがあります。礼拝も光も交わりもなく、神に近づくことも祭司の働きもないところ……そこに真に必要なのはリババルです。そのためには、生きた神のあかしを保つことです。なぜなら、礼拝のないところに奉仕はありませんからです。

さて、ここで、民は自分たちの靈的状態について警告されていましたことに注目していただきたいのです。ヒゼキヤが王座に着いたとき、預言者イザヤはすでに三十八年間預言していました。そして、預言者ホセアは彼の奉仕の終わりに近づきつありました

た。実際、イザヤ書七章には、イザヤがヒゼキヤの父アハズに会つたことが記されており、そのとき、アハズは預言者イザヤに偽りを言つています。このように、預言者たちは声を張り上げて民に警告しましたが、民は不敬虔な生き方を変えようとはしませんでした。アハズ王が民をそのような邪悪な道へと導き入れていたのです。

さて、ヒゼキヤの治世に行なわれた大いなるリバイバルを見て、いきたいと思います。ヒゼキヤが王となつたとき、彼はわずか二十五歳の青年でした。このことは若い信者にとつて励ましとなるはずです。年が若くとも、神のためにできることはあります。わずか二十五歳でしたが、彼はユダの民の靈的生活を一変させました。

彼のしたことにつっかりと目を向けていただきたいのです。彼はエルサレムをきよめたと言つてはならないものを取り除きました。彼がとつたこの処置に注目していただきたいのです。

彼の父アハズは偶像が拝まれていた山や丘の上に高い所を築いていました。それらの高い所はこわされ、偶像などの像もこわされました。民が偶像を礼拝していた他の場所は、木立ちや木の茂みでした。それらもとりこわされました。

しかし、非常に悲しいことが一つありました。モーセが荒野で用いた青銅の蛇が、偶像として礼拝されていたのです。ヒゼキヤはそれを取つて粉々にしました。ヒゼキ